

宋以前『傷寒論』考：六経不伝論

岡田研吉
研医会診療所

【はじめに】

宋板『傷寒論』は、太陽病の178条が突出して多く、次いで陽明病の84条が続き…厥陰篇に至っては僅かに4条文（『金匱玉函經』）だけである。所謂六経辨証は、不安定な基礎条件に立脚している。その原因を探った。

1. 傷寒日期

宋以前『傷寒論』（非宋改本）を代表する、『太平聖恵方』の卷九・傷寒日期の、各六病日の条文群数はほぼ均質である。『外台秘要方』の傷寒八家～傷寒日数病源並方～『肘後方』・『古今錄經方』などにおいても、傷寒日期の条文群数は一定である。

2. 太陽病の中下篇を欠く『傷寒論』

『淳化本傷寒論』とも言われる『太平聖恵方』卷八・六経病の、太陽病篇には上中下篇構成はなく、条文数も他の五経とバランスがとれている。宋板『傷寒論』発刊直後に刊行された『傷寒総病論』も同様に中下篇を欠いている。そこで、六経病過經後の傷寒（変生）雜病の処方条文群が、太陽病の中下篇に組み込まれている宋板『傷寒論』の特殊性を、「六経不伝」の病理概念に基づく編纂の為とあると仮説を立て検討した。

3. 『傷寒論』と「不伝の針」

宋板『傷寒論』太陽病8条は、「針足陽明、使経不伝則愈」として、太陽から陽明への伝經は阻止している。陽明病も184条「陽明居中…万物所帰、無所復伝」として、非伝經の病理を論じている。8条は、宋板『傷寒論』の太陽病が上中下篇で自己完結して、陽明病へは移行しない病理根拠であり、184条は、『素問』熱論に隸属する傷寒日期（三陽病発汗・三陰病吐下）の三陰病期の胃の実熱病証が、宋板『傷寒論』六経では陽明病期に移行編纂される根拠であると考えられた。

『諸病源候論』引用熱論の末尾に位置する「針足陽明、使経不伝則愈」は、宋板『傷寒論』では六経病篇の太陽病8条に移行している。『脈經』や『千金翼方』では宣刺篇に属し、（宋板『傷寒論』以前の）『銅人腧穴針灸図經』では「若傷寒過經不解、当針期門、使経不伝」として、既に傷寒病理に組み込まれて論述され、『長桑君天星秘訣歌』～『席弘賦』～『天星秘訣』～『針灸問対』も継承している。

此等の事実は、宋板『傷寒論』の各六経の病理条文群が、針灸理論を根拠に成立してきた事を示していると考えられた。

4. 針灸理論から本草へ

『傷寒総病論』は「針足陽明、使經不伝」として、太陽病篇を葛根黃芩（黃連）湯条で締めくくっている。この北宋代に芽生えた「太陽病から陽明病への伝經を阻止する葛根」の薬能は、金元医学に至って、經絡－經穴学説と本草の融合として発展を見ている。著名な針灸医を父に持つの張元素の認識は、李東垣の「葛根…以断太陽入陽明之路」として明文化され、『本草綱目』～『成方切用』も継承し、『医方集解』の葛根湯では、「恐將伝陽明、故加葛根以断之」としている。同時に桂枝湯の芍藥も、「表裏伝を阻止する」と認識されている。具体的には、合病の下痢に対する葛根や芍藥の、（『神農本草經』には見られなかった）本草学的発展（下痢という病症を直接的に治すのでは無くて、伝經を阻止する）である。

なお、『傷寒類証活人書』は、「伊尹『湯液經』桂枝湯中葛根、今藍本用麻黃、後矣」としており、葛根から麻黃に入れ替わった藍本は、『太平聖恵方』卷九：傷寒一日桂枝湯（桂枝・附子・乾薑・甘草・麻黃・葱粥）に相当している。それなので、桂枝加葛根湯において宋臣達の考察がなされている。

5. 『六經六層傷寒論』

廖平は、宋以前『傷寒論』の傷寒日期時系列に対応して、宋板『傷寒論』の各六經を「1～6日病期」に整理し、「六經六層傷寒論」を発明している。これは、『太平聖恵方』卷八の各六經病が、均しく桂枝湯（類）に始まって、順次に麻黃剤や柴胡剤を経て承氣湯類に裏伝しているのに一致している。即ち、太陽病篇のみならず、其の他の五經も上中下篇構成を潜在的に有している事を意味している。宋板『傷寒論』の、太陽病の桂枝湯に始まり調胃承氣湯に至る裏伝と、少陰病の麻黃附子細辛湯に始まり黃連阿膠湯に熱化する病理は、その好例である。

【まとめ】

宋板『傷寒論』六經の提綱証は、『足臂・陰陽十一脈灸經』に来源を見い出せる様に、灸と針の病理－治法体系に、經方の処方条文が併合されて、宋板『傷寒論』の六經病篇が成立している。両者の来源は本質的に別系統であるが、『諸病源候論』がインターフェイスを形成している。成無己の『素問』を取り入れた『注解傷寒論』に嚆矢を見る金・元医学は、針灸理論と本草を帰經学説の基に融合を計っている。太陽病から厥陰病まで順次型どおりに伝変する日期病能は、複雑系の臨牀にそぐわず、六經病伝変の関所として、必ず提綱証を呈するわけでもない。それ故に、各六經病期自身での内部病理変化を重視した『六經六層傷寒論』の必然性が生じた。此において、8条「若欲作再經者、針足陽明、使經不伝則愈」は、「再經の不伝」から「傷寒一日太陽病から傷寒二日陽明病への伝經阻止」へと変化し、「葛根断太陽入陽明之路」に昇華している。宋板『傷寒論』の本草学は、張元素～李東垣～王好古～羅天益等の金元医学を経て、末尾を飾る『本草綱目』で完成を見たと言えよう。